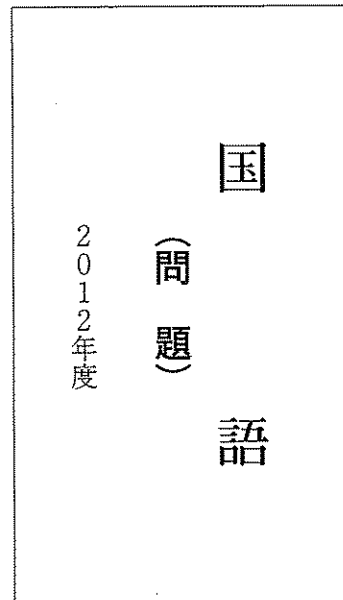




〈2012 H24062020〉

### 注 意 事 項

- 1 問題冊子は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべてマーク解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルでマークすること。
- 4 氏名は、試験開始後、マーク解答用紙の所定欄に正しくいねいに記入すること。
- 5 マークははつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでいねいに、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

|         |                                     |                          |                          |
|---------|-------------------------------------|--------------------------|--------------------------|
| マークする時  | <input checked="" type="radio"/> 良い | <input type="radio"/> 悪い | <input type="radio"/> 悪い |
| マークを消す時 | <input type="radio"/> 良い            | <input type="radio"/> 悪い | <input type="radio"/> 悪い |

- 6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

一八九五年、パリの詩人ステファヌ・マラルメは「この世界において、すべては、一巻の書物に帰着するために存在する」と書いた(「書物、精神の楽語」)。この決定的な一文によって、マラルメが書物という理念に託した世界観は、二〇世紀の知に最初の運動を与えた。詩人が夢想したこの究極の書物には個人の著者による署名がなかった。なぜならそれは、森ラ<sup>a</sup>万象のあいだに存在するありとあらゆる関係の総体であり、放つ燦々とした光の凝集体だったからである。マラルメにとつての書物とは、紙、印刷された文字、そしてそれらを綴織りに織り込んだ詩のテキストがつくりだす、夢見られた絶対的な「作品」としての世界そのものだった。そこで人々は、仮綴本の折られた丁が抱く闇にペーパーナイフを差し入れ、家畜を屠る料理人さながらに、世界の処女性を切り裂く原初の刃を閃かせるだろう。誕生であり、無垢の喪失であり、そして究極の死でもあるような世界としての書物。それは豊饒な理念と記憶を宿していたが、絶対性の神話のもとに

**B**。マラルメは書いた。《印刷された紙を折り畳むということは、ほとんど宗教的といえる行為である。だがそれ以上に素晴らしいのは、紙の積み重ねが厚みをもつことで、まさに魂の小さな墓標をかたちづくることである……》。生誕と死は、書物という世界の完全性のなかで円環を描くように、そこでひとつに折り畳まれていた。

それから一世紀が経ち、二〇世紀が発見したのは、マラルメのテーゼを反転させたもうひとつの真理、すなわち、「書物において、すべては、世界へと生成するために存在する」とでもいうべきヴィジョンであった。「書物」というかつての特権的な形態がいまや広く人々の手にゆきわたることによって、書物が体現する世界像はあまねく人々に分け与えられた。一冊の本が、人間に「世界」という多様な運動体の流れへと参入する入口を与え、世界がまさに思想的理念と物理的感触とを共に具えた世界へと「成る」過程を書物の存在が媒介した。ひとつの絶対的な世界を書物の姿として夢想する感性にかわつて、一冊一冊の本から立ちあがるミクロコスモスの彼方に世界の無限の可能性を透視する想像力が芽生えていった。そこで書物は、人間が彼ら自身の世界へと踏みだす敷居にいつも置かれていた。ジェイムズ・ジョイスが亡命先で『ユリシイズ』(一九二二)を刊行したとき、そこに描かれたダブリンという一都市におけるあらゆる音と声と匂いもたらず景観は、世界そのものの混沌とした豊饒を映し出す小宇宙として、誰にとつても抜き差しならない風景であると映った。ウィリアム・フォークナーの『アブサロム・アブサロム!』(一九三六)が深南部ミシシッピのデルタ地帯の翳から現われたとき、アメリカ奴隷制をめぐる固有の歴史をはるかに凌駕する、支配と屈従にかかわる全人類の記憶そのものの血流のような轟音を、人々はその本のページに聴き取ってシン撼した。「世界」という強烈な感触が書物から濃厚に立ちあがるのを人々は目撃し、紙とインクでできたこの小さなオブジェの驚くべき力をあらためて実感した。

「書物にならんとする世界」ではなく、これらの「世界にならんとする書物」たちのさまざまに異なった野心を受け継いまま、わたしたちは二一世紀への敷居をまたいだ。この新たな世紀は、数千年におよぶ人類の知性史において書物に託されてきたアイデアが、本という外形のなかで成就されてゆくかどうかだが自明ではなくなった、はじめての時代である。液晶モニターのなかにテキストやイメージとして躍動しはじめたユリシイズの末裔たち。だが彼らの透視する楽観的な未来に、どのような運命が待ち受けているかまだ誰も知らない。旧来の本というメディアと、電子テクノロジーが開いた新しいテキスト空間とが、決定的な断絶の関係にあるのか、それともある種の連続性のなかで展開する文化に帰属しているのか、それもまだわからない。だがおそらく、書物という形態の物理的な消滅という出来事が到来することがあるとするれば、そのとき人類の歴史が育んできた書物というアイデアの歴史もまたひとつの終焉を迎えるのであろう。書物は総体として、それ自身の体現する物理的な身体とともに、書物でありえたからである。それが、紙でできたものであれ、木や石や竹や皮革や陶板でできたものであれ……。

書物という形態は永遠ではない。その物質性にとりわけ注目すれば、それは火や水や湿度や年月の経過によって、焼失し、流れ去り、あるいは摩滅するしかない物質である。書物という形態の有限性への認識をもって、人間はまた、書物に託されたアイデアもまたけつして永遠のものではないことを無意識に了解していた。そしてそのことは書物の弱点ではなく、書物のむしろ力であり、書物が体現していたアイデアの豊かな源泉だった。ありえない不老不死の神話に背を向けるその有限性において、書物は人間の生命と身体条件としての有限性と直に結ばれた。むしろヴァーチャルなアーカイヴに組み込まれ、デジタルなデータ記号としての永遠の生命を得たかに見える本々テキストのほうが、死や消滅

への想像力を失うことで、かえって

C

から遠ざかっていくように私には思われる。

二一世紀の曙光を浴びながら作られた映画『愛の世紀』（二〇〇一）で、ジャン＝リュック・ゴダールはひとつの「本の終焉」の姿を映し出した。主人公の男が物語の冒頭で手にとるその本は、すべてのページが真っ白で、いかなる文字も印刷されておらず、テキストという中身をまったく欠いていた。

D

彼が広げた本は、ジョアン・ミロの鮮烈な青で飾られたシモーヌ・ヴェイユの一卷本『著作集』（一九九九、ガリマー刊）であった。人間の愚かさや美しさとともに愛の物語によって救済しようとする男は、ヴェイユに捧げる交声曲（カンタタ）を創ろうとしていた。青い本は、男の過去と未来を結ぶ記憶と憧憬そのものの形象だった。私の胸は、二度目の高鳴りを感じる。私自身が、おなじ装幀のおなじ本を傍らに置き、それを長いあいだ読みつづけてきたこと。いやそのこと以上に、ヴェイユが彼女のカイエ（手帖）のなかに遺した、生前には本になることのなかったこんな意味の書きつけが、不意に脳裡に甦（よみがえ）ってきたからである。『わたしは愛する存在は造られたものたちだ。それらは偶然から生まれた。わたしとそれらの出会いもまた偶然である。それらはいつか死ぬ。それらは限界づけられており、

I

も悪いものもある。そのことをすべて知ったうえで、なおかつ、それらを愛すること。

□

を、

H

として、限りなく愛すること……』ヴェイユは神の創造物すべてにたいして、この深いことばを書きつけたのだろう。けれども私は、これを書物に対して語られた至高のことばとして受けとめている自分に気づく。本の青は、過去という海の底への痛ましい沈潜と、未来への淡い期待の色として私のまえに揺らめき、書物と人間の出会いのかけがえなき偶然性を暗示する。

二

との、偶然の出会い。私たちは誰もが、そのようにして書物と出会うほかはないのだ。そして生命という、私が私自身と果たしたただ一度の出会いすら、この偶然性の外部にあるものではないだろう。世界のなかに私が住むこと。そして世界のなかに書物が存在すること。この二つの事実の偶然の関わりをめぐる、限りある消息をさまざまに探究することが、私の目標なのである。

（今福龍太『身体としての書物』による）

問一 空欄

A

C

に入る最も適切な語句を、それぞれ次のイ～二の中から選び、その解答欄にマークせよ。

A イ 作品

□ 理念

H 世界

二 精神

B イ 躍動してもいた

□ 閉じられてもいた

H 高められてもいた

二 関係づけられてもいた

C イ 知性の求める尊厳と謙虚さ

□ 現実を包み込む精神の冒険性

H 感情から生み出される豊穡さ

二 世界を明快に解釈する思想性

問二 次のイ～二の四つの文を並べ替えて空欄

D

に入るようにしたとき、三番目に来るものはどれか。最も適切なものを次のイ～二の中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ ページを繰る男の手は、それほどまでに切羽詰まった希求の気配を分泌していて私の胸を打った。

□ すべての文字が、テキストが、すなわち「意味」や「内容」が失われようとも、本という形態にすぎることによって、人間はそこから知性をめぐる深い記憶を引きだせるのだ、とでもいうように。

H やがて場面が過去に反転し、それまで美しい濃淡のあるモノトーンの白黒だったスクリーンがカラーに染まった瞬間、主人公の男が一冊の本を持って車に乗り込む姿が映しだされる。

二 男はしかし、繰り返し繰り返しページを繰りながら、その非在としての本、非在としてのテキストを読みつづける。

問三

傍線部 a・b に当たる漢字を含むものを、それぞれ次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

a イ ラ体

□ ラ致

H ラ列

二 奈ラ

ホ 僕ラ

b イ シン断

□ シン価

H シン級

二 シン犯

ホ シン動

問四 傍線部Ⅰ「誰にとっても抜き差しならない風景」の説明として最も適切なものを、次のイ～二の中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ こういう世界が確かにあるのだと、誰にも実感させるような、重い手ごたえのある風景。

ロ 自分がまるでダブリンのこの町の中に確かに立っている、ということを実感できるようなリアルな風景。

ハ ここに一つの都会の細部が、これ以上もないと思われる細密さで描き込まれている風景。

ニ 都会と人間とのつながりを、これまでとは違う全く新しい視点で浮かび上がらせている風景。

問五

空欄

イ

二

のうち、「限りあるもの」という語句が入らない箇所が一か所あるとすれば、それはどれか。最も適切なものを選び、その解答欄にマークせよ。

問六

本文が述べている内容と合致するものを次のイ～ホの中から二つを選び、その解答欄にマークせよ。

イ 書物とはそこから必要な情報や教養を得るための便利な道具ではなく、そこから未知の世界のリアリティにおそれるおそれる手を伸ばしていくきっかけになる存在である。

ロ 無心になって五感をすべて解放しながら未知の世界に触れる体験は、自分と特定のある一冊の本との出会いから生まれるものである。

ハ 書物とは世界そのものであり、世界の尖端で打ちふるえる何かの化身のようなものである。

ニ 事物と精神性の統合体としての書物を考えることのできなかつた一九世紀に対し、二〇世紀の新しいメディアの進展によりそうした統合が可能になると考えられるようになった。

ホ モノの主要な実体、本質部分を内部に隠すことにより、影のような形で姿を現したものが、書物なのである。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

見田宗介は、竹田青嗣の文体について興味深いことを述べている。そこでは「ほんとうの」ではなく「ほんとうに」という言葉が、重要な役割を果たしているというのだ。

「世界」は存在するのではない、人びとの欲望の相関者としてはじめて色めき立つものだ、という竹田の世界感覚は、自分にとってのもののみえ方が、まわりの人びとにとってのもののみえ方と、どうしようもなくズレているという事実を、日常の経験としてきた人間の感覚ではないかと思う。

竹田の文章が要所で放つ「ほんとうに」という副詞は、書くことの外部からくる息づかいのように、彼の論理の展開の、生きられる明証性のようなものを主張している。宮沢賢治は「ほんとうの」しあわせとか考えとか世界を求めた。竹田の断念は、〈真実〉を方法の場所に、形容詞ではなく副詞の場所にまでしずめている。

世界はあらかじめ **A** の存在としてあるのではなく、生きられることによって可能になる。だがその生の形式の裡にとどまるものは、世界を自明なものとして生きてしまう。それに対して、「あるのが当たり前」だと周りが考えているものを手に入れられない、あるいは失ってしまった人々は、その自明性の裡にあることができない。だからこそ「自明なもの」ほんとうの何かではなく、自ら生きることによって「ほんとうに」可能になる「それ」へと差し向けられることで、彼らは世界を獲得することができるのである。

哲学的には、こうした世界獲得は、ハイデガーからレヴィナスを経由してサルトルに至る、「存在すること」と「存在」の差異という現象学的命題、そして実存主義の主張として知られている。形容詞から副詞へ、名詞から動詞への転回は、「ほんとうの幸せ」を求めることではなく、「ほんとうに幸せになる」ことの意義を、私たちに示している。

私たちが「ほんとうに」幸せになることで、世界の意味を獲得することは、見られる対象として名詞化されることなく、見る主体として動詞化する可能性へと、私たちを誘う。宇多田ヒカルは唄う、「幸せになろう／当然の野望」(「幸せになろう」。「幸せにして」とは、彼女は決して唄わない。不確かな世界を受け入れ、その中でせめてもの幸福を手に入れようと望むことは、世界を諦めることとは違う。世界を見ることで、わたしたちは世界を手に入れるのだ。

それは具体的には、私たちが私たち自身を、社会科学的分分析の対象にとどまらない存在として自己承認すること、ことを意味している。多くの「ロストジェネレーション論」が私たちに向けるまなざしは、私たちがいかに「社会科学に」 **B** な存在であるかということを確認するものである。それはもちろん、科学的に正しい態度だ。

しかしその裡にとどまる限り、私たちは調査データの一部として、何パーセントかの困窮者の一人として、人称性を欠いた客体の一部として抽象化されざるを得ない。それは果たして、私たちの実存を満たすものだろうか。

なぜ「苦しい」ということを言うために、わざわざ社会科学の根拠を持ち出さなければならないのか。

**C** 。だとすれば私たちに必要なのは、社会科学的な客体として苦しみを正当化することではなく、文芸的な言葉を紡ぐ美的な主体として、実存そのものの金切り声を上げることであるはずだ。

繰り返すが、社会科学の施策は絶対に必要だ。しかし、それだけでは私たちは「ほんとうに」幸せになることはできない。それどころか、過剰な社会科学の呼び出しによって私たちは、実存的主体ではなく政治的な主体としてしか、世界に関わることができなくなってしまう。「そんなに苦しいなら、現政権を倒すために、私たちと一緒に闘おう」と呼びかけられるとき、私たちの苦しみは、「投票する有象無象の中の一票」へと切り縮められる。求めているのは、闘って誰かから何かを奪うことではなく、当たり前前に幸せになるということであつたはずなのに。

ただ普通に幸せに「なる」ということを宣言し、実践するためにこそ、豊かな「サブカル社会ニッポン」のリソースは使われなければならない。そこでの声を大文字の政治の中で主体化することや、まして、サブカルチャーそのものを政治化することが求められているのではないのだ。それは生きるための手段ではなく、生きること、幸せになることそれ自体として、私たちの周りに存在しているのである。

いつか訪れる救済に **D** を託す革命の論理が機能し得たのは、世界をラディカルに変えていくことが、私たちがほんとうに手に入れるべきものを教えてくれる最良の手段だと見なされていたからである。だがそれは現在の私た

ちが、未来に対する負債を背負っているという意識の下でしか可能ではない。そしてその負債を払わされているという認識が当然のように求められるようになるとき、「いつか訪れる革命」のときメシアニズムは、未来のための自己犠牲と献身を要求するカルトへと墮す。他方で、世界のラディカルな変革が進めば進むほど、希望は後悔へと変貌し、どちらを向いてもユートピアは(字義通り)存在しないことが明らかになってしまう。

「あいつらの取り分を奪えばうまくいく」「グローバルな市場のやり方に合わせればうまくいく」「いまある環境を全否定すればうまくいく」といった考えの持つ限界を克服するために、私たちに貧困や格差や競争や強さを要求しているなにかを捉え、批判し、現在を食い破っていくためにこそ、それらは必要とされている。新自由主義というモードに浸されたサブカル・ニッポンは、しかしそれゆえに、私たちの実存の声を上げる場へと反転する力を有しているのである。

必要なのは「苦しい」と率直に言うことであり、そして互いにそれを聞き合うことだ。根拠などなくていい、美しく飾り立てる必要すらない。「このまま殺されるくらいなら、いつそみんなを殺してやる」と自らを追い込まないためにこそ、語り合い、聞き合うことが求められている。そして、そのための場所は、サブカルチャーを通じて、この社会には無数に用意されているのだ。

社会科学の言葉と、文芸の言葉。形式としての客体と、声を上げる主体。いずれも私たちが生きていく上で、欠かすことができないものだ。「苦しい」と語り合う声が、いつしか「楽しい」と語り合う場を生み出すなら、そこにこの社会の希望がある。その希望こそは、私たちが「ほんとうに」幸せになるための

E

を促す力となるだろう。

(鈴木謙介『サブカル・ニッポンの新自由主義』による)

#### 問七 空欄

A

に入る言葉を、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 外部    □ 可能    ハ 生    ニ 自明    ホ 日常

問八 傍線部1はどういうことか、その説明として最も適切なものを、次のイ～ニの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ 社会科学的分析で客体化されてしまう私たちは、自ら見ることで主体をとりもどし主客のバランスを維持するのが、「ほんとうに」幸せを求めて世界を獲得するのにつながる、ということ。

□ 私たちにとっては、まず自分に可能な範囲を見さだめることから始めて、そこに「ほんとうに」幸せになるのを求めることが、より大きな世界を獲得することにつながる、ということ。

ハ 「ほんとうの幸せ」を求めて行動するのは終点のない試みであり、私たちにとって世界を獲得するとは、まず世界を自分の目で見て、「ほんとうに」可能な幸せだけを求めることだ、ということ。

ニ 見られる対象として客体化された私たちが、自ら見る主体へとすすみで、どんなにささやかであっても「ほんとうに」幸せになろうとするのが、世界を獲得することになる、ということ。

#### 問九 空欄

B

に入る語句を、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 不幸    □ 客体的    ハ 必要    ニ 抽象的    ホ 不確か

#### 問十 空欄

C

に入る文を、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 苦しみは社会的というより、実存的といったほうがよい  
□ 苦しみは社会的でもあるが、同時にすぐれて実存的だ  
ハ 苦しみは社会的ではなく、個の実存にかかわるものだ  
ニ 苦しみは社会的でもなければ、ただちに実存的でもない  
ホ 苦しみはまず社会的で、ついで実存的なものである

問十一 空欄 D に入る言葉を、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 実存    ☐ 現在    ハ 希望    ニ 変革    ホ 世界

問十二 傍線部2はどうしてそういえるのか、その理由として最も適切なものを次のイ～二の中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ 貧困や格差や競争を要求する新自由主義がなにかをはっきりさせ、批判し、食い破るのは、社会の中心の動向から距離をおくサブカルチャーにだけ可能だから。

☐ 現在のサブカルチャーは、貧困や格差などをもたらす新自由主義の席卷する現代社会に深く関係しており、それに対する「苦しみ」を語る社会的な場になりうるから。

ハ もともとサブカルチャーと、社会をうごかす中心の力としての新自由主義とは相容れず、サブカルチャーに没入すれば、新自由主義への不満を語るのは容易だから。

二 現在のサブカルチャーは、新自由主義のもたらす貧困や格差や競争や強さにすっかりなじんでおり、新自由主義への「苦しさ」の表明も許される場になっているから。

問十三 空欄 E に入る語句を、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 社会変革    ☐ 自己実現    ハ 限界克服    ニ 社会分析    ホ 世界感覚

問十四 本文が述べている内容と合致するものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 「ほんとうの」幸せや考えを求めた宮沢賢治は、世界を手に入れられず、世界を諦めるしかなかった。

☐ 「ロストジェネレーション論」の流行は、私たちに主体化を絶対に許さない社会を浮き彫りにする。

ハ 集団的行為から離れ、個々人が自由な政治的な主体になれば、新自由主義の乗り越えは可能である。

二 サブカル・ニッポンのリソースは豊かなので、私たちが当たり前に幸せになることを可能にする。

ホ 文芸の言葉が社会科学の言葉に対し優位にたつのは、文芸がサブカルチャーに分類されるからである。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

人<sup>ドシテ</sup> 而<sup>レバ</sup> 有<sup>二</sup>陰<sup>一</sup> 德<sup>、</sup> 必<sup>ズ</sup> 有<sup>二</sup>陽<sup>一</sup> 報<sup>ヲ</sup> 矣<sup>。</sup>  
人<sup>トシテ</sup> 而<sup>レバ</sup> 有<sup>二</sup>陰<sup>一</sup> 行<sup>、</sup> 必<sup>ズ</sup> 有<sup>二</sup>照<sup>一</sup> 名<sup>ヲ</sup> 矣<sup>。</sup>

陰<sup>いん</sup> 德<sup>とく</sup>とは、ひろくあらはさず内証<sup>ないしやう</sup>にて、よき道をおこなひたるをいふなり。このかくれたる徳も、必ず陽報<sup>やうほう</sup>とて天道にしろしめすゆゑに、そのむくいをほどこしたまふなり。

補注蒙求<sup>ほつしやうもんぐ</sup>に、賈誼<sup>かぎ</sup>が新書および列女伝をひき、また、因果録にも載せたるを、たがひにかんがあるに、むかし、孫叔敖<sup>そんしやう</sup>といふ人、幼少の時に、そとへ出でてあそびければ、両頭の蛇<sup>りやうづつ</sup>とてふたつかしらのある蛇を見たり。

そのときに、その子の母が、「なんちはいかなる子細ありてか、かくものを食はずして泣くぞ、と問ひけるほどに、叔敖<sup>しやう</sup>こたへていはく、「今日われ両頭のくちなはを見ければ、明日<sup>あす</sup>まで命をのぶべからず、といひけるを、母もとより世にすぐれたる人なれば、外<sup>ほか</sup>の事を聞き入れずして、まづ、その蛇はいづちにかある、と問ふ。叔敖がいはいく、両頭のくちなはを見るものは必ず死す、と日ごろより聞きおよびしゆゑに、他人のまたこれを見んことをおそれて、地にうづみける」といふ。母、このことばを聞きてはいく、うれふることなかれ、なんちは死ぬまいぞや、そのゆゑは、人として陰徳<sup>いんとく</sup>あれば陽報<sup>やうほう</sup>有り、天はたかけれども、ひきき地のことをよく聞けり、徳は不祥<sup>ふしやう</sup>にちかち、仁は百禍<sup>ひやくゑ</sup>をのぞく、といふ事あれば、なんちは死せぬのみならず、あまさへ楚<sup>そ</sup>国におこらん、といふ。成人してのちに、はたして令尹<sup>れいゐん</sup>といふ官人になれり。その国の民が、叔敖<sup>しやう</sup>は蛇をさへうづむほどの人なれば、いつはりあるべからず、とてそのことばをよく信じけり。

また、秦<sup>しん</sup>の穆公<sup>ぼくこう</sup>駿馬<sup>しんば</sup>をうしなはれし時、五人のぬすびと、この馬をころして食らふ。穆公、五人をころさずして、くすり酒をたまふ。そののち晋と秦といくさあり。かの五人、命を惜しまずはたらく。穆公のいはく、陰徳陽報<sup>いんとくやうほう</sup>を得<sup>う</sup>とは、これこのいはれなり、と。

次の句に、人として陰行<sup>いんかう</sup>有れば、必ず照名<sup>しやうめい</sup>あり、とはその身に道をおこなふ徳行<sup>とくかう</sup>あれば、陰行とてかくれておこなふ事なれども、照名とてあきらかなる名があらはれて、天下にかくれなし。この方より名をあげんとするはあし。名は実<sup>じつ</sup>の實<sup>ひん</sup>と莊子<sup>しやうし</sup>もいへば、名は実の道よりあらはるる

A のごとし。道<sup>みち</sup>をば B のごとくするがよし、となり。

(『実語教童子教諺解』による)

問十五 傍線部1の意味として最も適切なものを、次のイ、ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 自分の命について何かを述べている余裕などないだろう  
ロ 自分の命を持続させることはとても不可能だろう  
ハ 自分も他人も命をとられることになるのだろう  
ニ 他人の命に対して責任をとるわけにはゆかないだろう  
ホ 他人の命を少しでも伸ばすことにはならないだろう

問十六 傍線部2「し」と文法的に同じものはどれか。文中の二重傍線部イ、ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

問十七 傍線部3はどのような人のことをあらわしているか。最も適切なものを、次のイ、ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 両頭の蛇が恐ろしい生き物だと知りながら、勇敢に立ち向かうことができた人  
ロ 両頭の蛇の特性をよく知らなかったのに、それを地中に埋めることができた人  
ハ 両頭の蛇のもたらす災厄が他人に及ばないで済むことを第一に考えて行動した人  
ニ 両頭の蛇を見てしまった際に、まだ子どもでありながら自分の死を覚悟しえた人  
ホ 両頭の蛇を地中に埋めるといふ大変な仕事を率先して行う社会性を有した人

問十八 傍線部4は何をさしているか。最も適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 官人としての孫叔敖が楚の民に向けて示したことは  
ロ 楚の民が孫叔敖を信頼できると確認したときのことば  
ハ 孫叔敖が蛇を地中に埋めたという話を伝えることば  
ニ 孫叔敖が蛇を地中に埋めた理由を述べた際のことば  
ホ 孫叔敖の母が息子の出世を予想した際に発したことは

問十九 傍線部5「秦の穆公」に関する話の中で、「陰德」はどのようなことに相当するか。最も適切なものを、次のイ〜二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 五人のぬすびとが穆公の駿馬を盗んだ上に、その馬を殺して食べたこと  
ロ 晋とのいくさで、かつてのぬすびと五人が命を惜しまずはたらいたこと  
ハ 穆公が五人のぬすびとに自分のもつていた駿馬をあえて盗ませたこと  
ニ 穆公が五人のぬすびとを殺さなかった上に、くすり酒まで与えたこと

問二十 空欄

A

B

選び、その解答欄にマークせよ。

に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ

- イ A 兄 B 弟  
ロ A 弟 B 兄  
ハ A あるじ B 客人  
ニ A 客人 B あるじ  
ホ A 親 B 子室  
ヘ A 子室 B 親

問二十一 問題文の出典である『実語教童子教諺解』は、江戸時代に成立している。次のイ〜ホの中から、同じく江戸時代に成立したものを一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 金槐和歌集 ロ 古事記伝 ハ 風姿花伝 ニ 方丈記 ホ 梁塵秘抄

問二十二 次の漢文は、波線部『補注蒙求』の原文である。これを読んで、あとの(1)〜(3)の問いに答えよ(返り点、送り仮名を省いた箇所がある)。

賈誼新書曰、孫叔敖為<sub>ニ</sub>嬰兒、出遊<sub>シテ</sub>而還<sub>リ</sub>、憂<sub>ヘテ</sub>而不<sub>レ</sub>食。其母問<sub>フ</sub>其故<sub>ヲ</sub>。泣<sub>イテ</sub>而対<sub>ヘテ</sub>曰、今日<sub>ニ</sub>吾見<sub>タリ</sub>兩頭蛇<sub>ヲ</sub>。恐<sub>テ</sub>去死<sub>ス</sub>無<sub>レ</sub>日矣。母曰、今蛇安<sub>クニカ</sub>在<sub>ル</sub>。曰、吾聞<sub>ク</sub>見<sub>ル</sub>兩頭蛇者<sub>ハ</sub>死<sub>ス</sub>。吾恐<sub>レ</sub>他人又見<sub>ンコトヲ</sub>、已<sub>ム</sub>埋<sub>ム</sub>之<sub>ヲ</sub>矣。母曰、無<sub>カレ</sub>憂。汝不<sub>ナ</sub>死<sub>ス</sub>。吾聞<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>、有<sub>ニ</sub>陰德者<sub>ハ</sub>天報<sub>ユルニ</sub>以<sub>テ</sub>福<sub>ヲ</sub>。人聞<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>皆<sub>ニ</sub>喻<sub>ス</sub>其為<sub>ル</sub>仁也。及<sub>ビ</sub>為<sub>ニ</sub>令尹<sub>ニ</sub>、未<sub>ダ</sub>治<sub>メ</sub>而国<sub>ニ</sub>人信<sub>ズ</sub>之<sub>ヲ</sub>。

列女伝曰、有<sub>ニ</sub>陰德者<sub>ハ</sub>陽報<sub>ユ</sub>之<sub>ヲ</sub>。德勝<sub>ニ</sub>不祥<sub>ニ</sub>、仁除<sub>ク</sub>百禍<sub>ヲ</sub>。天之処<sub>ニ</sub>高而聴<sub>ル</sub>。爾必興<sub>ズ</sub>於楚<sub>ニ</sub>。及<sub>ビ</sub>長<sub>ズルニ</sub>、為<sub>ニ</sub>令尹<sub>ニ</sub>、老<sub>イテ</sub>終<sub>ハル</sub>。

(1) 傍線部 a に返り点を施す場合、最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 恐<sub>レ</sub>去<sub>二</sub>死<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>日<sub>一</sub>矣  
ロ 恐<sub>レ</sub>去<sub>二</sub>死<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>日<sub>一</sub>矣  
ハ 恐<sub>二</sub>去<sub>一</sub>死<sub>二</sub>無<sub>レ</sub>日<sub>一</sub>矣  
ニ 恐<sub>レ</sub>去<sub>二</sub>死<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>日<sub>一</sub>矣  
ホ 恐<sub>レ</sub>去<sub>二</sub>死<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>日<sub>一</sub>矣

(2) 傍線部 b は何をさしているか。最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 孫叔敖    ロ 母    ハ 両頭蛇    ニ 令尹    ホ 国人

(3) 空欄 c に入る漢字として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 罪    ロ 衆    ハ 徳    ニ 道    ホ 卑

〔以下余白〕



